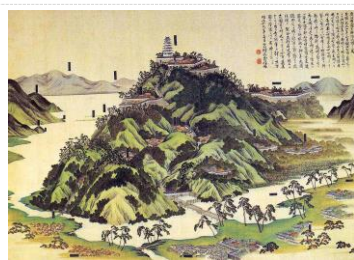


●春日部市民文化講座（第 32 回） 「茶室の文化—国宝「待庵」と「如庵」の話」

◆日時：2020 年 1 月 29 日(水) 11 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■序：安土桃山時代の建築文化 安土城：織田信長

今日は「茶室の文化」というテーマですが、私の頭の中では「茶室の話」です。茶室は建築物ですから、歴史上の建築物からお話を進めてまいりましょう。茶の湯が盛んになった安土桃山時代に際立った建築物といえば「安土城」ですね。安土城というのは、織田信長が彼のビジョンを達成するために造ったとてつもない建築物なのですね。天守閣とい



安土城図、プレイズマンより引用



安土城天主台跡、攻防団より引用

うのは、江戸時代になってから「守」の字を充てているのですが、信長の時代には「天主台」と「主」の字を書いていて、安土城址に行くと「天主台跡」と書かれているのです。時代によって呼び方が変わるのですが、そんなことも行ってみないと分からないのですよ。そして、信長は安土城の下に城下町を造りました。所謂「楽市楽座」ですね。そして、彼は天下人として権力を示すためには民衆の安楽を約束するのですね。そこに商人たちを呼び、自由に商売をさせたのですね。ぼくが信長が凄いと思ったのは、安土城下に神学校を造ったことです。高山右近がその親分だったのです。そこに当時のエリートと言われる大名の子どもたちを呼んで、信徒として養成していたのです。ところが、本能寺の変の時に明智勢によって壊され燃やされてしまい、多くの信徒たちが死んでしまったのです。そこで安土における神学校の歴史は終焉してしまうのです。歴史ってそういう凄さがあるのですね。応仁の乱の時代は、京の街にも戦さで殺された死体があり、飢饉で食べ物が無く死者が出る時代だったのですよ。そんな時代のことを紐解いていくと「茶室」が出てくるのですよ。それが桃山時代だったのです。

■時代を遡って室町時代建築文化

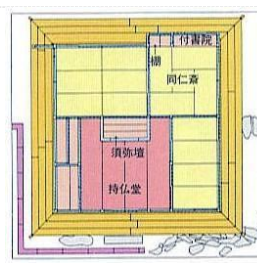
安土桃山時代の前に遡ってみると、銀閣寺です。銀閣寺の「同仁斎(どうにんさい)」という四畳半の茶室があります。これは足利義政がお茶を飲む場所として造ったと言われている書院付きの部屋で茶室の原点であると言われています。

■聚楽第：豊臣秀吉

次が豊臣秀吉の「聚楽第(じゅらくだい)」です。「聚楽亭(じゅらくてい)」とも言われ、楽を集めてみんなを楽しませたいということで命名されたのですが、ここで茶碗を焼かせたので長次郎の「樂家」は聚楽第の「楽」をもらい、京都の土と京都の石で樂吉左衛門さんの家はずっと続いているのですね。秀吉が造った聚楽第というのは御所の近くで、しかも御所よりも二条城よりも遙かに大きかったと言われていますが、焼失してしまいましたので広さは不明です。



同仁斎の書院



東求堂の平面図

■千利休の茶室

次に注目したいのは「千利休の茶室」です。この時代、「利休の茶」というのが流行言葉になっていたのですね。それは、それまであったお茶と違うものということだったのですね。素人でも違いが分かるという文化が千利休によって創られました。このように安土桃山時代の建築物に見られるものを今日は「覚悟」でまとめてみました。

■西行の覚悟

最初は西行(1118-1190 年)です。この人は遁世歌人(とんせいかじん)ですよ。世の中から離れて、それでもすねるのではなく、真面目に世の中を見る心を持っていた人です。高野山を本拠地として、よく漂泊の旅に出ては和歌を作っているのですが、彼は平安時代の宮廷のエリートであり、武士でもあったのです。その人が世捨て人になり、家族まで捨てたのです。「捨てる覚悟」があり、その覚悟で生き抜いた人が西行なのです。「寂しさに耐える人のまたもあれな 庵並べむ冬の山里」という和歌を私なりに解釈すると、「今まで皆と共に生きる楽しみ喜びを知る者が、それを捨てて生きる覚悟の出来る人であるならば、隣に庵を並べたいものだ」と詠っているのです。結局、これは皆さんと同じように人の温もりを求めているのです。西行が理想とした和歌があります。「願わくは花の下にて春死なむ そのきさらぎの望月のころ」。西行の理想としたのは春 2 月満月の頃、これは釈迦の入滅の日で、その日に自分も死にたいと願って、まさにその通りに世を去っているのです。西行という人は、権力、財産、名誉などこの世にある全ての欲望を全開に生きていた人ですが、それを全部捨て世を捨てて山里の庵に入る覚悟を示すのです。

■捨ててこそその覚悟の人々 鎌倉から江戸まで

1. 『徒然草』 吉田兼好

次に「捨ててこそその覚悟のある人々」として鎌倉時代から江戸時代までの人たちです。最初は「つれづれなるままに、日暮らし、硯(すずり)に向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」の吉田兼好です。この人も宮廷の蔵人ですよ。権力や財産などを持っていた人なのですが、30歳前後で家を捨てるのです。ですから、何も無い人が捨てたと言ってもダメなので、今自分の手にあるものを捨てる人が価値があるのです。今、大切にしているもの、大切に思っていることを捨てた時に、あなたの真の価値が現れるのですよ。吉田兼好は、宮廷の官位や家を捨てて、もののあわれという日本人の意識を作品にしてくれ、文学を通して自分の価値を示してくれたのです。素晴らしい日本人の先輩ですよ。

2. 『方丈記』 鴨長明

次が『方丈記』の鴨長明です。鴨長明という人は下鴨神社の官司さんだったのですよ。『方丈記』の中で長明は、安元3年(1177年)の都の火災、治承4年(1180年)に同じく都で発生した竜巻およびその直後の福原京遷都、養和年間(1181年～1182年)の飢饉、さらに元暦2年(1185年)に都を襲った大地震など、自らが経験した天変地異に関する記述を書き連ねていき、もう京都の街はズタズタですよ。そういうことを彼は経験して、北野に建てた方丈の庵に籠もって書き記していくのです。方丈は四畳半の部屋ですね。下鴨神社に行くとなると入ることは出来なけれども、その佇まいが分かるように再現してくれています。

3. 「僧侶・歌人」 良寛

その次の良寛という人も凄いですね。長野の禅僧であり、歌人ですね。この人の凄さは、ぼくの歳になって恋をしていることです。自分よりもずっと若い人に恋するのですが、男にとっては凄いなと思います。そして、お互いが正直に書き記しているのです。この覚悟は日本人の凄さだと思いますね。

4. 「俳諧師」 松尾芭蕉

そして、皆さんが好きな人は松尾芭蕉でしょうね。この人は謎のひとですよ。伊賀上野の出身で全国各地を旅したということは分かっているのですがね。ぼくは「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」という句が好きですね。中学生の時にぼくの大好きだった先生が「高橋、これをオレ流にもじるとな『旅に病んで夢は御国をかけ廻る』って言うてびつたりなんだよな！これがオレの生き方なんだよ」と言っていたのを思い出します。その方はクリスチャンだったので、その境地は今の私と一緒にです。芭蕉さんという人も俳句に生きて、全てを捨てて何も持たずに死んでいった人ですね。この句は、旅の途中で周りはワイワイとやっている中で、死期を悟った芭蕉が病臥の中で詠んだ句ですね。

■侘び茶人の覚悟

こういう「捨ててこそその覚悟」の文化というか、強い意思表示というか、そういうものが時代の流れの中でさまざまな人によって遺されてきました。そういう中で「利休の茶」に代表される侘び茶人たちの覚悟が現されるようになります。

1. 村田珠光

その最初が村田珠光です。珠光の文の中で出てくる「冷えかるる(枯れる)」という言葉がぼくは好きですね。良い道具を持ってその味わいを知り尽くし、自分の心の成長に合わせて位を得て、やがて辿り着くのが「冷えて」「瘦せた」境地だと言っています。また、「月も雲間のなきは嫌にて候」ですね。月も雲一つない状態では嫌気がさす、月は満月で煌々と輝いているよりも、雲がかかって見え隠れしている方が好きだと言っているのです。完全なものよりも不完全なもの、簡素なものに美しさを見出したのが、珠光の侘びの境地だったのです。さらに「藁屋に名馬をつなぎたるは良し」は好きですね。それはイエス・キリストが生まれたのが厩、馬小屋なのですね。そういう意味でも類似性があるのですが、皆さんは藁屋と茅の家との違いが分かりますか。藁は数年で腐るのですが、茅は数十年保つそうです。だから藁屋の方が情けないのです。だから珠光は「藁屋」にしていって、みすばらしい「藁屋」に「名馬」をつなぐ、このコントラストが侘びの極意なのですね。そのコントラストを感じ取る心が侘びの心なのです。村田珠光が遺した言葉で「茶禅一味」という言葉があります。これは「一期一会」と同じくらいに皆さんが好む言葉です。これは本当に珠光が言った言葉のようです。大徳寺の一休禅師から座禅を学んでいますからね。珠光は本物の禅師と出会っているのですよ。皆さんも、人との出会いでは偽物との出会いはダメで本物の人と出会ってください。

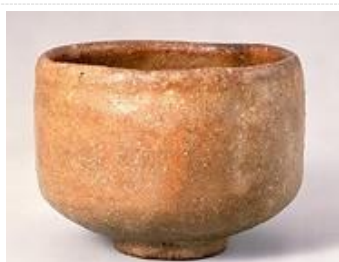
2. 堺の武野紹鷗

ここで敢えて「堺の」と書いたのは、武野紹鷗は京都に居た人です。その京都の人が戦乱を避けて堺にやってきて侘び茶を広めたので「堺の」と書きました。この人も利休さんと同様に堺の納屋衆の一人です。武野紹鷗の弟子に千利休と日比谷了慶という2大茶人の弟子がいたことを覚えておいてください。日比谷了慶の家にはザビエルをはじめ数々の宣教師たちが宿泊し、彼は自宅を教会として提供しました。そんな宣教師の中の一人ルイス・アルメイダ

が堺で病に倒れた時、日比谷了慶の家で看護を受けました。そして、アルメイダが快復した祝いと了慶の受洗を祝して自宅で茶会を催しました。宣教師たちにとってそのお茶会はしんどいものだったと思いますよ。今でもお茶会は4時間近く座っているのですからね。それがルイス・フロイスによって記録されているのです。異国人でフルのお茶会を経験した記録があるのです。それが日比谷了慶の家です。彼の家と千利休の家は極々近くだったのです。豪商たちは、お金がありますから広大な屋敷の中に山中のような庭を造り、簡素な建物を建てて侘びた茶室でお茶を楽しんだのです。それが「市中の山居」なのですね。武野紹鷗は「枯れかじけ寒かれ」と言っているのです。かじけは、やつれる、生気を失う、かじかむ、やせ衰えるという意味の古語で、自分が枯れて、やつれて、生気を失い、やせ衰えてかじかんでいるけれども、実際には精神の自由さ、はつらつさ、独立性は決して失わないということです。また、これは定番ですが、「見渡せば花ももみぢもなかりけり 浦のともやの秋の夕暮れ」という藤原定家の和歌を彼は「侘びの心」としたと言われています。ぼくはそこに「たなびく煙に温もりの色を感じる」と付け加えましたが、ぼくがこの和歌から感じ取った思いです。捨てて捨てて一人になった時、ぼくはこの温もりのある手は温もりを求めるということです。人は人を求めるということです。心は心を求めているということです。それ以上に貴いものはないということです。その覚悟を武野紹鷗は持っていたのです。彼は四畳半の茶の湯を確立した人です。堺に行くと四畳半の茶室があり、利休さんはそこで茶を学びました。

3. 千利休の茶室のこしらえ(囲い)

武野紹鷗の後を継いだのが千利休です。その時代になると「利休の茶」という言葉が流行るのです。そして彼は茶室を造るのです。当時は茶室とは言わずに「囲い」と呼ばれていました。その特徴はまず「露地」です。この露地の「露」というのは、露出の「露」で「さらけ出す、あらわになる、裸になる」という意味ですから、私たちが茶室に入る前に躊躇のある露地を静かに歩む間に、自分の本当の姿をさらけ出す覚悟がなければ茶人とは言えないし、茶室に入る資格がないのですよ。表千家では、「露地にあっては赤心でありなさい」と言うのです。あるがままに、飾らない心です。だから、自分を飾らずにあるがままに生きていくためには修行がいりますよ。修道が必要ですよ。次に茶室に入るために「躰り口」を造りました。この躰り口についてはいろいろな説があつて、朝鮮半島の民家説というのがあります。次に、南蛮船や淀川を往き来する屋形船のくぐりからヒントを得たという説、商家の防犯用の潜り戸だという説、そして、これはぼくの説ですけれども「狭い門」です。聖書の言葉に「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。」(マタイによる福音書7章13-14節)とあるのですが、狭い門から入るためには自分の欲を捨てるのです。さらに千利休の凄い知恵は、躰り口の外側に造った刀掛けですよ。武士に刀を置いて茶室に入りなさいと暗黙のルールを作ってしまったのです。利休さんが茶室を造った雰囲気というのは、イエスが山上で弟子や群衆に語った説教「山上の垂訓」に非常に似ているのです。例えば露地では自分を捨てるという世界観があり、露地には躊躇と燈籠がセットで水と光です。これは聖書の根本の一つで、聖別の水、命の水の象徴が躊躇であり、世の光である燈籠がセットにあって、いのちに至る細い道の露地、そして天国に入る狭い門の躰り口というのが実にみごとに仕組まれているのです。この燈籠は、利休さんの後になると織部燈籠といってキリシタン燈籠が置かれるようになります。キリスト教の十字架の姿をしているのが織部燈籠です。今はキリシタン燈籠というよりも織部燈籠と言った方がいいですね。茶室には躰り口から入りますが、その時にはプライドも捨てて入ります。どうしてかと



長次郎作赤楽茶碗「太郎坊」
文化遺産オンラインより



長次郎作黒楽茶碗「大黒」
文化遺産オンラインより

いうと、茶室の中では武士も町人もなくお濃茶を廻し飲みするのです。あの狭い空間の中での人と人との触れ合い、亭主と客とのもてなし、もてなされる関係で一番理想的な距離感が茶室の距離感なのです。理想の距離感というのは、侵害されない、だからといって疎遠にされない距離感なのですが、そこには温もりがあります。そして次が、「長次郎の赤と黒の茶碗」です。皆さんは「赤茶碗」というとツヤツヤした茶碗を思うでしょう。でも、樂直入(15代樂吉左衛門)さんは「長次郎の赤は土

の色だ」とおっしゃっているのです。だから、赤は化粧釉をふっと掛けただけで土の色なので、高台を見ると土そのものが見えるでしょう。では、赤は何かというところ自身なのです。聖書でアダムというのは「赤い土」という意味なのです。凄いでしょう。これは偶然ですかね。千利休は最初に「赤」の茶碗を焼かせたのです。そして次に「黒」を焼かせたのです。黒はとっぴりと高台の中まで釉薬を付けて焼いています。こうした違いがあるのです。次に、千利休は「茶室を四畳半から一畳半まで」縮めていくのですが、次の国宝の茶室で話していきます。

■国宝の茶室

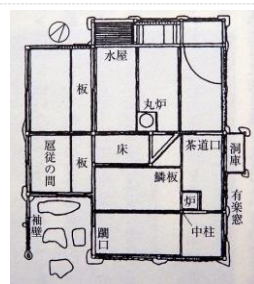
いよいよ「国宝の茶室」について話を進めます。国宝の茶室は千利休が造った「待庵(たいあん)」、織田有楽斎が造った「如庵(じょあん)」、そして小堀遠州が造った「密庵(みつあん)」と3つあります。

1. 「待庵」

「待庵」について小松茂美先生の論文でぼくは発見しました。高山右近が千利休に杉丸太 6 本を送ったのです。「これを直ちに 1 本使うことになったからありがとう。秀公も喜んでいる」という手紙があるのです。その杉丸太が「待庵」には使われています。この「待庵」が造られた時に高山右近は利休さんから信頼されていて材木の目利きをしたのですよ。凄い話でしょう。この時に、利休さんはこの茶室で使うのにぴったりの茶杓を作っているのです。赤の茶碗にも、黒の茶碗にもそれぞれ相応しい茶杓を削っているのです。それが何と「十字架」の形をしていたという私論を出したのが、熊倉功夫先生の大先生にあたる**西山松之助**という方です。その私論をいただいて、ぼくは先生とお目にかかって利休が作ったのと同じ白竹実竹の茶杓を一本お願いしました。姿は本当にクルスです。この茶杓は長次郎に茶碗に相応しく、長次郎の茶碗は「待庵」に相応しいのです。それは 15 代の樂吉左衛門さんが、彼の家にある長次郎の黒を「待庵」に持って行って床に飾って、「やっぱりこの茶碗はここが相応しいよねえ」と言っているのです。

2. 「如庵」

次の茶室「**如庵**」です。この「**如庵**」は織田有楽斎が造りました。織田有楽斎が二畳台目の茶室を造った時に、とんでもない変な仕掛けを造ったのです。鱗板というのがあって裏に謎の三角形があるのです。これは今までいろいろな人がいろいろなことを言っていましたけれども謎です。本来であれば茶室というのは無駄な空間を造ってはいけないというのが常識な



「如庵」平面図

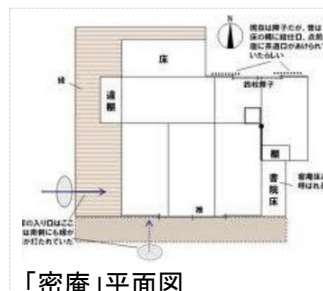


「如庵」外觀

のですが、織田有楽斎の謎の空間を造ったのです。正伝院の和尚さんから「明治時代に『如庵』が祇園衆に払い下げられて移築された時に、謎の三角形の中から仮託信仰物が出てきたということ为先代の久田家の宗匠から聞きました」という証言をばくがもらっちゃったのですよ。織田有楽斎の「如庵」はキリシタンの茶室だったねっていうふうになったら面白いと思いませんか。

3. 「密庵」

「密庵」は見られません。大徳寺の塔頭で竜光院にある茶室です。ぼくはこの僧侶に言われました。「あなたがこの茶室を見たいのであれば、牧師でも構わないので何日間か入門すれば、いつでも掃除をさせてあげるから」と言われました。見たいので入門したいのですが、この歳になってここを掃除するのはなあ・・と思っています。お寺の掃除って大変なんです



「密庵」平面图



「密庵」内部写真

よ。この部屋は小堀遠州作ですね。「桂離宮」の作庭奉行であり、古田織部の弟子です。しかし、古田織部から小堀遠州に替わった時に茶の雰囲気、好みががらっと変わりました。どう変わったかということ、小堀遠州の好みは「明るく、綺麗になった」のです。「綺麗わび」。古田織部までが「利休の茶」です。そういう時代分けができますね。この茶室は明るいで、窓が大きく開いています。そういう違いがありますね。ここは書院の茶室です。

■利休が辿り着いた一畳半の茶室

利休さんの茶室は一畳台目席です。台目というのは点前でおもてなしする側が 1 人座り、一畳には最大で 3 人です。ぼくたちが死んだら一畳に寝かされますよね、そして見送りしてくれる人の温もりが欲しいですよね。それが台目席に座る 1 人なのです。マザーテレサという人がね、カルカッタで死にゆく人たちと友だちになったのかというと、「最後の時だけでも手を握ってあげたいじゃない」って、温もりですよ。だから医者が放棄した後でも私たちができることはいっぱいあります。それは死にゆく人の手を握り続けることだけでも素晴らしいおもてなしだと思います。利休さんという人は、そういうことが分かる感性を持っていたからこそ「一畳半の茶室を見事に造りあげる覚悟があった」と申し上げて終わります。

時代を追って「捨ててこそ」の人々のお話、そして茶室のお話と引き込まれていきました。